

古武道の実戦性について 吉峯康雄

おそらく、古武道の実戦性はどれほどのものなのか？ という疑問を持たれている人は多いのではないのでしょうか。

まあ私としては、頭ごなしに否定されるよりは、疑問視されるほうがずっとましなのですが。

そういうわけで、今回はズバリ、古武道の実戦性について書きます。

しかし、ここではっきりさせておきたいのは、実力とは所詮は個人差でしか

なく、流派の優劣もとどのつまりはそれに携わる人のレベルの優劣でしかない、ということです。つまり、実力とは個人的な飛躍の度合いによって決まるものなのです。ここではそれを古武道に限定して考えてみましょう。

以前も書きましたが、おそらく古武道は、武道の世界を次の三つに分けているのではないのでしょうか。一つは古武道の型に希望を託す人々、それを否定する人々、そして古武道を知らない人々。なぜなら古武道の型とは、仏教で言えば法華経や般若心経のようなものになっているからです。つまり、これを信奉する人は確かに多いけれども、内容を本当に理解している人は少なく、ましてや使いこなせる人となると無限少だからです。

こう書くと「そんな馬鹿な。古武道の型は先人の実戦経験の結晶であって、最高の文化だ」「使えないものが今の今まで伝わっているわけがないじゃないか」という答えが返ってきそうです。それなら現在伝わっている全ての型の内実を、現実的に全て説明できる人が何人いますか？ おそらくわけもわからずに、ただ漠然と反復している人の方がずっと多いのではないのでしょうか。本当なら、型というものをもっと疑ってかかってもいいはずなのに、それすらもしないではありませんか。

疑ってかかることと否定することは別です。

そもそも、なぜそんなことになったのでしょうか。、昔日の沖縄空手では「型は教えても手は教えるな」と言われていました。ここで言う「手」とは型の具体的な用法や、型に含まれている極意的な技術をさしています。これに加えて秘密にされたのが鍛練法でした。中国拳法でも「拳を伝えて法を伝えず」という言葉がありますが、ほぼ同じような意味であり、鍛練法を秘密にするとともに同じです。

つまり、型を実用化するためには、空手で言う手、中国拳法で言う法の要素、そして鍛練法が不可欠になるわけです。こうした部分は沖縄でも中国でも、限られた一部少数の弟子にしか教えなかったと思われます。そうなれば当然ながら、大多数の弟子がやらされることは表面の形式だけということになります。そうなったら、何らかの突破口を作らなければならなくなります。空手の場合はかなり早い段階から組手の研究がなされ、既存の技術を元にして、約束組手や自由組手の方法や技術が創意工夫されてきたことは周知の通りで、これなしには本土や海外での普及は成し得なかったでしょう。それに関しての評価は諸説あるでしょうけれども、最初に組手の方法を研究した人は偉いと思います。

では古武道ではどうでしょうか。

おそらく古武道の実戦性に疑問を持つ人は、現今の古武道に形式以上のものを見出せないからではないのでしょうか。形式以上のものがなければ、自由攻防のような局面にぶつかれば、ほとんど何も出来ないに等しいのではないかと。

まあ確かに、伝書から復元した型の表面をコレクションして、単純で感化されやすい人たちから先生と呼ばれてふんぞり返るような人は論外としても、形式に翻弄される人が多いのは紛れもない事実です。

しかし、それを以て古武道の本質だとは思ってほしくないのです。どんな武道でも形式とは稽古の手段なのであって、形式に翻弄されるのは本来あってはならないことだからです。たとえば奉納演武の時でも、単に型を惰性で反復しているだけか、それとも型の前後にやるべきことをちゃんとやっているかは、見た目にもはっきりわかるものです。

では、古武道には空手の手、中国拳法の法に相当するものはなかったのでしょうか。そうはとも考えられません。おそらくは極端な秘密主義のために、不明になってしまったのではないのでしょうか。

古武道の秘密主義について、斬心塾の東郷秀信先生からこんな話を伺ったことがあります。

「弟子から武器は取り上げることは出来ても、一度教えた技を取り上げることは出来ません。ましてや昔は技を知られることは、下手をすれば命に関わる大事ですから、

やっぱり秘密主義にならざるを得なかったでしょう。そこで必然的に一子相伝とか唯授一人ということになり、長い間に技の用法や鍛練法などの内実が不明になっていたのではないかと思います」

私はこれは充分にありうると思います。かの武田惣角翁は決して人前では自己鍛錬を行わなかったというし(その高弟の佐川宗範もまたしかり)、植芝盛平翁が違う流派を名乗って教えた時には烈火の如くに怒り、斬り殺さんとばかりに東京に向かっているし(幸い盛平翁は留守だったので命拾いをしたわけですが)、後に山本一刀斎先生に「お前も技を教える時は、弟子を良く選べよ」と言ったそうですが、これが当時の武道家の感覚だったわけです。

それでは話を整理するために、実力をつけるためには何が必要なのかを、もう一度考えてみる

ことにしましょう。

武道における実力とは、技術一切のレベルと、攻防能力の総和の比較であることは前にも述べました。では、それは何を土台にして養われるものでしょうか。それは技の正確さと胆力、洞察力の三つである、というのが私の考え方です。技の切れとスピードとは、本来は技の正確さに先導された体の練りによって養成されるものだからです。中国拳法の指導体系は、これらの原則に則って緻密に構成されており、下肢の強化を初めとする体練法から始まって、基本技術や型、対練法などを順次学んでゆき、攻防能力が段階的に開発できるようになっていますが、これはよく出来ていると思います。

では、このようなことは古武道では不可能なのでしょうか？ 結論を先に言えば「可能である」と思います。

但し、一般論としては「現状では困難である」と答えざるを得ません。

なぜなら、それを可能にするには大変な努力が必要だからです。稽古方法も創意工夫しなければならぬし、稽古そのものの真面目にやらなければなりません。そしてそれは、現状の古武道の枠組みの中では困難だからです。それに、強くなりたくて武道を求める人は、そんな苦労なんかしなくても手っ取り早く強くなれるものを選んでしまうことが多いのです。ですから古武道では優れた人材はなかなか出てきません。

しかし、もし可能であれば稽古システムを見直すことによって、上達へと向かうことは出来ると思うのです。そのためには、自分の目指している武道の形が、現実的な次元で見えていなければなりません。

現今の古武道には特有の美意識や価値観があり、開祖からの伝系がはっきりしているとか、古伝を墨守しているといったことに比べて、稽古

内容を創意工夫しているとか、現実的な思考といったことはどうも軽く見られがちです。ですから、他所の師伝に対して「あそこは型が崩れている」だの「伝承がおかしい」といった類の、いわば内出血のような批判が飛び交ったりするわけです。

このような現象は、武道を静止したものとして考えているからに他なりません。それでは、江戸時代までに一つの流派から沢山の分派や支流が生まれたことを説明できません。そして古武道の伝系に対する考え方は、実は武家社会の家の制度と完全に重なり合っているのです（だから血脈伝承を重視するのです）。そんな思考では、現実に対応することはむべくもありません。

つまり現今の古武道は、深入りすればするほど浮世離れしてゆく構造を持っているのです。

昭和から平成にかけて、幾つかの新興流派が登場し、特に最近では急速な発展を目にします。しかし古武道家の多くは伝統護持の立場から、これらをレベルの低い流派とみなし、現実即応の内容であることが文化として軽佻浮薄であるかのような言い種でお茶を濁してきた傾向がありました（これは今でもあまり変わりません）。

しかし実際はどうでしょうか。新興流派は活発な普及活動によって現代に大きくアピールし、加えて中国拳法のような海外から輸入された武術も普及の一途をたどり、古武道は大きく水をあけられているのが現状です。

中でも注目すべきはフルコンタクト空手と太気拳の台頭です。この二つはいわば、あらゆる伝統武術に対するゲバルトです（これについては長くなるので別に述べます）。

これらと古武道とを比較した時、古武道側が最も遅れをとっているのは武道としての活性化の度合いと大衆扇動力です。この二つは重要なもので、具体的に言えば一定の実力レベルを持ち、盛んに普及され、多くの人に支持されているの

かどうかであり、これなしに面目を保とうとするなら、とどのつまりは形骸化した伝統にしがみつくなくなります。前述したような、形式に翻弄される人が多いのはそのためです。そうなれば武道としての内実は、それだけ水うめされることになります。その拳句の果てが、酔漢の拳固さえ捕れそうもない、弛緩しきった技しか出せない人が、活字で名人の如き妄語を並べるという珍現象です。

現在、古武道には振興会や協会といった全国組織が確かにあります。しかし残念ながらこれらは古武道の中央集権化という機能しかなく、古武道を活性化させるには到っていません。つまり、肝心の運動体としての機能はほとんどないに等しいのです。

というわけで、ひどい調子でぶっ書いてしまいましたが、現今の古武道はこのような問題を抱えているのです。抜本的な解決には、まずは内在的革新を基本とした方向転換が必要であり、これなしには古武道の真の再興は望めません。そしてそれは、全ての古武道志向者にとっても不幸なことなのです。

武道と価値観 吉峯康雄

さて以前、このホームページで「武道も含めたあらゆる文化の存在価値は、即物的に貨幣価値に還元するような考え方では計り知れないものなのです。

(中略)そして大事なことは、あらゆる文化は、実際にはこういう人々によって維持されているということです。書道、絵画、彫刻、陶芸、刀剣、占術、映画、すべてがそうなのです」と書きましたが、果たしてわかっていただけたでしょうか？

これは仄聞によるのですが、ある武道関係の出版社の社長が「空手を夢中になってやる人の気が知れない。毎週一定の時間に人が道場に集まって、きつい稽古をして汗を流して帰ってゆく。ああいう時間の使い方をして何がいいんだかさっぱりわからない」とのたまったそうです。空手の好きな人が聞いたら卒倒しそうですが、ぶっちゃけ、わからないものは仕方ありません。空手がいかに素晴らしいかを力説したって、「わからない」と言われたらそれっきりです。

なぜなら、どんな言い方をしたところで、武道は価値観の世界でしかないからです。つまり、同じ価値観を共有する人でなければわからないのです。いや、武道に限らず、書道、絵画、彫刻、陶芸、刀剣、占術、映画、すべてそうでしょう。これらから価値観を取ったら後に何も残らないと言っても過言ではありません。

たとえば衣食住は、価値観の如何に関わらず、それが無いことにはどうにもなりません。もちろん人によって好きなファッション、好きな料理というのはあるでしょうけれども、そんなことは二の次です。まずは衣食住がなかったらどうしようもない。

ところが武道はそうではありません。職業武道家とか、武道ジャーナリズムとか、武道に関連して生活の糧を得ている人は別として、大多数の

人にとっては人生のために武道が存在しているのであって、武道のために人生が存在しているわけじゃありません。

だからこそ、武道は色々な方向性があるって当然なのです。素手の格闘の強さが一番だと思うのなら、それでもいいし、剣道が最高だと思う人がいても、中国武術が最高だと思う人がいても、古武道に心酔する人がいてもいいわけです。古武道でも、初代から脈々と伝えられた伝承を重んじるのも、内容の術理にこだわるのでも、どちらでもいいし、空手でも、フルコンタクトもあれば、競技空手や古伝の空手、琉球古武道などなどなど、流派も色々あるし、その中で自分に一番適したものを選べばいいわけです。なぜなら、価値観という点では全て等価だからです。

ところが、どうもこの点についてはわかってもらえないことが多いのですね。どんな価値観や尺度を持とうと、その人の勝手ですけれども、それを平気で他人様に押し付けてくるのには閉口させられます。たとえば、何でもかんでも格闘技として比較しようとする。これについてはこれまでも何度も書いてきたので、重複を避けますが、実に困ったもんだと思います。えっ？ それのどこが悪いの？ それではうんとわかりやすい例を挙げることにしましょう。

以前、ある古武道研究者が「スポーツをする奴は人間の屑だ」とのたまったことがあります。その言い分はこうです。「スポーツ競技などを人がなぜやらなければならないのか。スポーツを楽しむでやることが果たして本当に正しいことか。それより先に、人が人として修めるべき文化や修行対象があるのではないか」これは一見もっともらしそうな意見であり、そう言いたくなる気持ちもわからないではありませんが、実は古武道という価値観の土俵の上に立って、それを押し付けているに過ぎません。早い話が、自分が他人よりも高級な価値観と持っているかのように錯覚しているからであり、前出の「空手を夢中になってや

る人の気が知れない」と言うのと同次元なのです。つまり、そのように視野を狭めてしまう自分の価値観については何も問わないんですね。

しかし、この程度ならさしたる扇動力はないので愛嬌で済みますが、場合によっては愛嬌では済まないこともあるのです。たとえば、これは悪口だと思われては困るのですが、フルコンタクト空手や大気拳が伝統武術に対するゲバルトであることは以前も述べました。しかしゲバルトの方向性は、一つ間違えれば伝統武術文化を解体させる作用もあるように思われます。なぜなら、フルコンタクト空手も大気拳も、既成の形式の否定と即物的な強さを出発点にしているからです。

しかし以前も書いたように、武術史とは天地開闢以来、形式と非形式との間を時計の振り子のように行ったり来たりするものでしかないのです。つまり、陰が極まれば陽になるように、形式が極まれば非形式が生まれ、非形式が極まれば形式が生まれるのであって、それがいわば自然の摂理なのです。従って、どちらかに固執すれば、必ず煮詰まって飽和状態になってしまうのです。

そして、ここからが大事なのですが、即物的な強さを第一とした場合、その尺度に合わない武道はいとも簡単に否定されることになります。本来、伝統武術というものは(国の内外を問わず)個人の価値観や尺度に先立って存在しているのですが、そういうことは見事に無視されるわけです。具体的にどうということかを知りたいければ、小島一志著「最強格闘議論」を読まれたらいいと思いますが、おそらくは、この本のようなものの考え方をしている人は大勢いることでしょう。

しかしそれは歴史的必然だから仕方がないじゃないか、と思われるかもしれませんが、実はそうではありません。こうした尺度は、所詮は文化的に作られたものでしかないからです。つまり、誰かが何らかの啓蒙の意図を以て世に喧伝したものでしかないのです。ぶっちゃけ、フルコンタクト空手の場合は覇権主義的なマーケット獲得の

ためのタクティックとして、既成の空手の形式の否定と即物的な強さを至上とする価値観を著作や漫画、記録映画などを使って世に喧伝させたのであり、それが今に到るまで尾を引いているというだけのことなのです。即物性至上主義が暴力原理主義と根底で密通していることは以前も述べましたが、何しろこれは狡猾なほどにも魅力的な価値観ですから、こればかりはいかに私が歯ざしりをしたって跳梁に歯止めをかけることは出来ないのでしょう。

しかし視点を変えて、即物的な強弱の尺度が、果たしてどこまで適用可能なものなのか？ となると、やっぱり疑問符をつけざるを得なくなるのです。というのも、限定された分野での優劣が、全体の優劣を決定するとは限らないからです。

昔、「猿の惑星」というSF映画の傑作がありました。光子ロケットで宇宙飛行中のテイラー大佐(チャールトン・ヘストン)は、コースを誤って、ある星に不時着するのですが、そこは猿(類人猿)が人間(口を利けない)を支配している恐るべき星だった、という筋ですが、文明風刺としても優れていたと思います。テイラーは運悪く猿たちに捕まってしまうのですが、猿たちがテイラーに対して、人間が猿よりもいかに下等動物であるかを証明しようとする場面がありました。「お前は猿の憲法十八条が何かを知っているか？」テイラーが黙っていると「知らないだろう。それ見ろ。人間は下等動物だ」という塩梅です。ところが猿たちのボキャブラリーには「空を飛ぶ」という言葉はなく、テイラーがロケットで空からやってきたと説明しても信じてもらえず、テイラーが紙飛行機を折って飛ばすとびっくり仰天するわけです。猿の世界の考古学の重鎮であるザイアス博士(モーリス・エバンス)は、実は人間が下等動物ではなかったことを密かに知っていて、その証拠になる遺跡を爆破してしまいます(1)。

これを武道に置き換えて考えてみれば、私の言わんとすることは理解できるのではないかと思

います。

確かに何事によらず、実体的なレベルというものはあります。たとえば数学なら、足し算と引き算しか出来ない人よりも掛け算や割り算が出来る方がレベルは高いでしょう。しかし数学には更にそこから先に微分積分、果ては大学の理数系で学ぶようなレベルまであるわけで、そこまで知っている人が知らない人よりも優れているとは言いきれないのです。それに、数学者が古文書の原文を読めなかったとしても恥でも何でもありません(古文書の研究者なら話は別ら恥ではないわけです。何事によらず餅は餅屋であって、専門流儀に勝るものはなく、そこに共通の尺度などは成立しないのです。

しかし昨今はそういうことは敢えて無視し、即物的な強弱が共通の尺度であるかのように錯覚する人が実に多いのです。そういう人に限って、二言目には実戦という言葉を連発するわけですが、これも、これほど倣岸不遜なことはないのです。前述の「最強格闘議論」にしても、そういう偏頗な尺度を前提にして書かれていることは言うまでもありません。

かつて古武道では(今も大抵そうですが)個人の強弱を論じることと他流の批判をすることは厳禁でした。まずは頭の上のハエを追え、というわけです。少なくとも、他人が作った価値観で人生を誤るのは愚かしいことではあります。武道は価値観が全てなのですから、全ては同じ価値を以てやってくるのです。ですから「自分はこれだ!」と思ったものを追求するに如くはないのです。

武道と宗教 吉峯康雄

得てして武道家は一般人と比べると、すごく自信過剰で鼻持ちならないように見受けられることがあります。これは徒手の武道ほど、そういう傾向があります。しかしながら、自信というのは大変もろいものなのです。なぜなら、武道で自信を得るまでには大変な努力を要するわけですが、失うのは一瞬だからです。武道はそれほど不確定な要素で成り立っているからです。

ですから、ある一定の年齢になると武道界における政治的な立場を維持しようとする人が多くなるわけで、なるほど確かに武道を専業とするのなら、その方が有利なのは言うまでもありません。どんな業界にも政治的な立場というものはあります。たとえば映画界なら日本映画テレビ技術協会(余談ながら、以前は私も会員でした)や日本映画監督協会なるものがあるし、占い師にも全国組織である日本占術協会があります。つまり、どんな業界でも一種の中央集権制度のようなものがあり、中央に近ければ近いほど政治的な立場を維持できるわけです。それに何事によらず、寄らば大樹のたとえ通り、多数派や主流派に属している方が立場が安定するわけです。

但し、私は武道に関する限り、そういうものには全く興味はありません。なぜなら、それは武道の本質とは何の関係もないからです。それに私はこれでも言論人の端くれですから、人脈のしがらみによって純粋な発言が出来なくなってしまうことが恐ろしいと思うのです。何よりも私は武道は自分を高めるためにやっているのであって、人に教えると言っても、あくまでも個人単位であり、それを以て身過ぎ世過ぎの糧としているわけではないし、ましてや組織化しようなどとは思いません。つまり、自分を神棚に揚げる必要は全くないわけです。考えようによっては大変気楽なものです。武道は宮仕えではありませんから、追求する方向性は人それぞれ違って当然なのです。

まあそれはともかく、古武道界でやたらと権勢を振るい、武道マスコミまで意のままに動かそうとする人には実に困ったものです。どんな業界であれ、一つの派閥が言論機関を支配するというのは、民主主義の原則から逸脱するという意味では大変に危険なことです。それが罷り通るのは、古武道がいかにも遅れている世界であるかを示す端的な例といえましょう。

そもそも、どんな分野にでも批判的な立場というものはあります。たとえば、私の意見にも批判や反論があつて当然なのであって、むしろそういうものが全然なかったら気持ちが悪いです。一つの意見やあり方に対して賛成意見が義務付けられて、一切の批判や反論を許さないとなったら、それは全体主義か宗教になってしまいます。ですから賛成の人、反対の人、或いはどっちつかずの人と色々あつていいわけです。

ところがどっこい、武道の世界はけっしてそうではありません。つまり武道と宗教は限りなく近い性質を持っているといえましょう。

もっとも宗教の場合はあくまでも観念の体系であって、武道のような唯物的なものではありません。つまり根本の部分は論証が不可能なのです。しかし、その論証不可能なものを土台にして、文化や思想体系が成立してしまうことは古今東西よくあるのです。

では、宗教になりうるかどうかはどこが違うのでしょうか。それはこういうことです。たとえば、私がある日突然「我こそは神の化身である」と言い出したらどうなるでしょうか。たちまちキチガイ扱いされて、弟子はあきれて全員逃げ出し、興武会は壊滅すること必定でありましょう(笑)。しかしもし「我こそは神の化身である」と言った時に「はい、左様でございます」という人が集まってくれば、その時点でもう印ではなく教祖になるわけです。つまり宗教とは、観念の体系が複数の人に共有された状態なのです。

これは別に洒落で言っているのではなく、あらゆる宗教の発端とは概ねこのようなものなのです。キリストも釈迦もマホメットも例外ではありません。要するに、教義に何らかの普遍性があったからこそ、2000年以上も支持されてきたと思います。この点はマルクスレーニン主義も同様で、結局は信じるか信じないかの問題になります。もちろん、これらは全て観念の体系ですから、それを実証しろという方が無理難題かもしれません。それに、いくら私だって、観念の体系が全て悪いとは申しません。そんなことを言い出したら、抽象的な理論は全て虚妄ということになってしまいます。それでは単なるニヒリズムにしかありません。ですから本当に問題にすべきは、観念の体系としてどれだけの質の高さを持っているかなのです。

もっとも一口に宗教と言っても、その方向性は教派や宗旨によっても違います。たとえば仏教一つとっても、浄土系のように絶対他力を旨とし、個人も社会も、絶対的な彼岸に向かって打ち捨ててしまう場合もあれば、禅宗系のように自己主義を完全に克服できるまで自分を見つめ続ける場合もあります。

ちなみに占いも観念の体系です。しかし宗教と決定的に違うのは、占いとは基本的に実用本位であるということです。つまり占いは、直接的に人生の指針として使えなければ意味がないのです。

それでは武道はどうでしょうか。武道は根本的には唯物的なものですから、観念の体系である宗教とは本来は相容れないものです。しかし、そのあり方には宗教と似通ったところがあります。たとえば古武道だと、宗教の教祖に相当するものが開祖であり、開祖以来の型や伝書は宗教で言う經典に相当します。あるいは現代武道や格闘技のように、師範の実力を信奉する場合もありますが、これも精神構造的には宗教への信仰心とよく似ています

それかあらぬか、昔から身分の低い者が世に出るには宗教家か政治家になるのが一番手っ取り早いと言われています。政治家ではかつて平民宰相と言われた原敬がそうだったし、戦後は何と言っても田中角栄が代表格でしょう。宗教界でも同様で、帝政ロシア末期の怪僧ラスプーチンしかり、創価学会の池田大作しかり、オウム真理教の麻原彰晃しかりで、この人たちの宗教への情熱は、実は権勢欲と表裏一体だったわけです。教義の前には帝王だろうと下僕だろうと一視同仁ですから、宗教の世界にはどんな人が入ってきても構わないわけです。

で、武道の世界にもこれと同じような方向性の人は少なからず存在します。そうすると例外なく武道の宗教化が行われます。

それでは宗教の場合、その信仰が本物かどうかをどこで見極めればいいのでしょうか。答えは簡単で、信仰のために何かを犠牲にしているかどうかです。

たとえばそれが雲水や密教僧のような修行だったり、慈善奉仕だったりするわけです。大体において、犠牲なき信仰は偽物です。宗教は楽をする手伝いでは決してないのです。たとえば「こうすれば修行も何もいらずに幸福になれる」とか「この世の終末がやって来ても、入信した者だけは助かる」と言ったら、十中八九怪しい宗教と見て間違いありません。なぜそんな人が出てくるのかと言うと、信者を依存させて意のままに操ることは快感だからです。だから、宗教の絶対数の半分はダークサイドに落ちてしまうわけです。

これと同じような現象は、当然ながら武道にも起こります。たとえば「苦しい稽古なんかしなくても、口伝を得れば誰でも強くなれる」といった類のことを言う人は、まず怪しいと見てよい。なぜなら、それが弟子を正しく指導していることになるのかは、少し考えれば誰でもわかることだからです。しかも武道の場合、入門の動機が何らかのコンプレックスであることが多いわけですが、そ

れかあらぬか、師範と名が付く人には、暴力が全てを覆せるかのような妄想を抱いたり、弟子を自分に依存させることに快感を覚える人も少なくありません。つまり武道の場合もダークサイドに落ちる率は高いと言えます。そうなったらむしろ宗教よりも始末が悪いといえましょう。それも、人間の業がそれほど善なるものばかりではないから仕方がない、と言ってしまえばそれまでですが、結局のところ、自分自身を律することが出来るのは自分しかいないのです。ですから、自分の人生をちゃんと扱えない人は武道も宗教も向かないのかもしれないかもしれません。

私が考える真の宗教人とは、我と我が身を犠牲にして列車の乗客を助けた長野政雄(1)や、羅須地人協会を作って無料奉仕にけ暮れた宮澤賢治、「無一物中無尽蔵」をモットーに生涯印可を受けず、寺を持たず、修行僧としての人生を全うした沢木興道(2)、最下級の神父として貧者救済のために東奔西走して一生を終えたゼノ神父のような人物なのです。もう、このような宗教人は二度と出てこないのでしょうか。